

【解説】

「あほだら経」というものがある。もちろん普通のお経ではない。

これは、江戸時代中期に僧体の大道芸人願人坊主が唱えた、世俗を風刺したニューズ即興的俗謡だ。彼らはこの「あほらしい時事風刺文句」をお経のように唱え、また群れをなして歌を歌い、踊り歩いた。

その歌のひとつが「ないものづくし」である。その名の通り、この世の中にないものを羅列し、リズミカルに「くがない」で韻を踏んでいる。

では、実際に史料を見ていこう。

2行目に「上巳の大雪めったにない、桜田騒動とほうもない」とある。上巳とは桃の節句のことだ。3月3日に雪が降ったと聞いて、ピンと来た方もいるだろう。1860年3月3日に起きた大事件といえば「桜田門外の変」だ。

その日、江戸城桜田門の外で、登城中の大老井伊直弼が襲撃を受け、殺害された。彦根藩の行列は60名ほどだったが、大雪で刀の柄には雨具をかぶせてあったため、とっさに応戦できなかったという。死者8名、重軽傷者5名。軽傷者は後に切腹を命じられた。

加害者は水戸・薩摩藩の有志18名。井伊の、日米修好通商条約の調印の断行をはじめとする、数多くのワンマン政治に反発しての犯行だった。こちらは、闘死、自刃、死罪あわせて死者16名。彼らは御公儀のために政事を正道に戻すことを目的としていたが、かえって幕府衰亡のきっかけとなってしまった。以上が桜田門外の変の概略である。

この事件の様子を皮肉めいて歌っているのが、2行目後半から8行目前半の部分。どちらかというと、彦根藩側の不手際を指摘している。

8行目以降は、事件を受けての世の中の様子だ。せっかくの春の行楽シーズンだが街に人はなく、真偽の判断がつかない情報が錯綜したという。噂とは怖いものだ。人々の不安はいかばかりか。

ただでさえ、諸外国からの圧力と内政の混乱という、内憂外患の状況があった。「全体役人腰がない、是で世の中治まらない」と言いたくもなるだろう。

実際に10年と経たず、江戸幕府は倒れることになる。

このないものづくしは、一方で珍妙なラップのようにも聞こえるし、一方では抗議の歌のようにも聞こえる。皮肉やユーモアでくるんだこの歌は、口あたり良く、のどごし良く、人々の中に入ってくる。直接的に、激しく非難するよりも、ずっと効果的に。現代においてはSNSに置き換えて考えると、人間というものは時代を経てもそんなに変わらないのだなど、しみじみ親近感を得る。

この史料は比較的読みやすいので、ぜひリズムにのって、読解に挑戦していただきたい。

【翻刻文】

ないものづくし

凡世の中ないものづくしの多き中にもことし
ないものたんとない上巳の大雪めつたにない桜田そふ
どふとほうもないわずかな人です仕様がないそ

こでどうやらお首がない夫にちつとも追てが
ない率でどこへかうせてない駕籠ハあつても

釣りてがない上杉番所色がない御番所どこ

でも留てがない浪人少もよわ気がない脇坂

取次でてがない桜がさいても見てがない茶屋

小屋芝居ハ行てがない唐人噺は丸でない

道中飛脚の絶間がない伯耆の噂ハう

そでないそこで板倉つつがない讃岐の

さわぎハ知る人ない其外此世の出てがない

常陸の宝蔵たからがない一躰親父が人でない

薩摩の野人馬わからない諸屋敷門に出入がない

夜中ハさつぱり通りかない町人金子持きがき

でない老中増供みつともない全躰役人腰が

ない是で世の中治らないそれでもまづまあ

軍いくさがないどうかわたしハ請合ない

へない物のないハともあれ埒らちもない

めつたな事ハいふものでない